
雪だるま

零・ZA・音

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪だるま

【Nコード】

N4459A

【作者名】

零・ZA・音

【あらすじ】

ゆつくりと降り積もる雪は世界を白く染め上げていた。いつぱい降った雪の中から僕は生まれたんだ……。

空から、ひらり、ひらり、と舞い落ちる。

ゆつくりと、でも確実に、ふわり、ふわり、と世界を白く染め上げていく。

そして、僕は生まれた……。

朝　真つ白な世界に、一つの足跡。

僕を作ってくれた女の子の小さな足跡が庭中にいっぱい。

ころころと雪玉を転がす女の子が、手を合わせて息を吹きかけて、また雪玉を転がしていく。

冷たいのに、寒いのに、それでも止めようとしなない。

「さきちゃん、頑張るもんね。寒くはないもんねえ」

大きな雪玉と小さな雪玉。

その二つを重ねて僕は作られた。

僕は雪だるま。女の子が一生懸命作ってくれた雪だるま。目や鼻、口……顔を作って、手には手袋をつけてくれた。

「わあいつ、できたあ」

僕が出来たとき、女の子は嬉しそうに笑ってくれた。

女の子の名前は『さきちゃん』

さきちゃんは、嬉しそうに笑みを浮かべ、家の中へと走って行った。

どこに行っただろう？　なんだか寂しいな。

そう思っていたら、しばらくしてさきちゃんが大きな女の人と手を繋いで歩いて来た。

あれは誰だろう？　でも、さきちゃんはなんだか嬉しいそうに、

「ママ！ 見て見てえ」

僕を指さしていた。

「すごいねえ、さきちゃん」

「うんっ」

嬉しそくに返事をしているさきちゃんに、『ママ』と呼ばれた人も優しい笑顔を向ける。

……僕もなんだか嬉しい。

ママはさきちゃんの頭を優しく撫でながら、

「もう、学校に行く時間になっちゃったから、続きは帰ってからね」
背中を押して家の中へと歩いて行こうとする。

どこ行くの？ さきちゃん……。

ちよつと悲しそうな顔をしたさきちゃんが、何度も僕の方を向いて歩いて行く。

さきちゃん、そんな顔をしてないで。なんだか分からないけど、僕はここにいるから。

でも、僕も歩けたら……僕も動けたら。さきちゃんと一緒に『学校』ってところに行けるのに。

ゆつくりと時間は流れて。

なんだか温かくなってきた。空は太陽が顔を出して、その光で僕を照らしている。

……どうしよう。

このままだと、僕は溶けて消えてしまう。

僕の身体が段々と溶けていって、足元に水が流れ出している。
早く帰ってきて……さきちゃん。僕、段々と眠くなってきたよ。

夢

僕は歩いていた。不思議な感覚だけど、これは僕なのかな？
人間の姿をしている僕。目に入ってくるのは、人間の手や足。
どうして、こんな格好で歩いているんだろう？ ……夢？ それ

とも、僕のお願いを神様が聞いてくれたのかな？ でも、今なら、この姿なら、会いにいける。さきちゃんに会いにいける。

「さきちゃん……」

「……だあれ？」

突然、声を掛けられて、驚いた顔をしているさきちゃんが、僕を見ている。

僕は、ちゃんと人間の姿をしているのかな。

「僕は……ゆき」

「……ゆき、ちゃん？」

小首を傾げて不思議そうに僕を見つめるさきちゃんには、誰だか分からないみたい。

僕は君が作った雪だるまなんだよ。

「さきちゃん。はい……コレ」

「……手袋？」

手に持っていた手袋を、さきちゃんの前に出した。

「さきちゃん……落し物だよ」

「あ……私の手袋だあ」

朝、一生懸命僕を作ってくれたとき、手袋を僕の手につけてくれたから。だから、きつと冷たいだろうと思って……。

「ありがとう。……かたつぽだけ？」

僕の手から手袋を取り、キョトンとしてるさきちゃん。

「ごめんね……もう一つは、持ってくるときに落としちゃったんだ」

「そうなんだ……でも、暖かいよ」

そう言っ、僕の手を握ってくれたさきちゃんの手は暖かかった。片方は冷たい手……片方は温かい手。

でも、どちらも僕を作ってくれた優しい温もりを持った手。僕の

大好きな手……。

「……ありがとう」

「なあに？」

「何でもないよ。それじゃ……僕」

そのまま、歩いて行こうとした僕の手を握ったままのさきちゃんの手が、さっきよりも強く握っていた。

「ゆきちゃん、帰っちゃうの？」

「あ、えつと……」

「一緒に遊ぼう」

につこり、と微笑んでいるさきちゃんが僕の手を引いて行こうとする。だけど、

「あ、あの……お家帰らなくていいの？」

「少しだけだから、いいの。それにゆきちゃんとなんだか遊びたいの」

そう言った僕の手を更に強く握って、近くの公園まで駆けていった。

それから僕達は一緒に遊んだ。

公園の中で、『ブランコ』『シーソー』って言うので遊んだけど、とても面白かった。

さきちゃんとたくさん遊べて嬉しい。でも……。

「僕……そろそろ、帰らなきゃ」

「ええ、もう帰るの？」

頬を膨らませているさきちゃんは、まだ遊び足りない様子だった。でも、僕はもう”ここ”にいる事が出来ないんだよ。

「……うん。もう、時間みたいだから」

「そうなんだ。じゃあ、また遊ぼうね」

膨らませていた頬を戻して、笑顔のさきちゃんは嬉しそうに僕にそう言ってくれた。

「……うん。また。遊ぼうね」

「うんっ、遊ぼうね」

さっきと同じように、笑顔のさきちゃん。

「ただ、ごめんね　僕には「また」が無いんだ……。」

「さきちゃん……」

「なあに　あれ？」

最後に言った僕の声は、さきちゃんには聞こえなかったみたい。だつて……僕は消えてしまったから。それでも伝えたい。

ありがとう……さきちゃん。

家に帰って来たさきちゃんは泣いてた。

ママに「帰りが遅い」って怒られていたけど、それは僕のせいなんだよ。さきちゃんは悪くないんだから怒らないで。

そんな声ばかり聞こえる家の中から出て来たさきちゃんが、僕の姿を見てまた泣き始めた。

「雪だるまさんがあ……」

ぼろぼろ、と大粒の涙を流していくさきちゃんを、ただ見ているだけしか出来ない事が悔しかった。

泣かないで……。

何度、心の中で呟いてもその声は届かない。

家の中から出てきたママが、泣きじゃくるさきちゃんを優しく撫でてあげる。

「雪だるまさんは、お家に帰ったのよ」

「お家に……？」

「うん……また、さきちゃんがいい子にしていたら、遊びに来られるわよ」

さきちゃんの頭を撫でながら、僕が”いた”場所を見て微笑むママ。

もう少しだけ、時間があるのかな。最後のときまで僕は、さきちゃんのそばを離れたくないよ。

僕を作ってくれたさきちゃん……僕と一緒に遊んでくれたさきち

やん。

「また」はないかも知れないけど、約束は出来ないけど

また……遊びにくるね、さきちゃん。

ゆっくり、と意識が薄れていく僕の目に、

「ばいばい……雪だるまさん。また、遊ぼうね」

空に向かって手を振るさきちゃんの手には、僕にくれた手袋が片方だけ握られていた……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4459a/>

雪だるま

2010年10月8日15時17分発行